真の豊かさとは

宮田　修　千葉　熊野神社宮司

相変わらず田舎暮らしを楽しんでいる。気候の影響を気にしながら野菜や果樹の栽培に取り組んでいる。晩秋の大切な仕事は〝黒豆〟収穫である。今年は残念ながら大不作であった。原因はわからない。それでも喜びは大きい。

　畑から抜き取り、寒風にさらして乾燥し、ブルーシートの上で竹の棒で叩き莢の中の豆を取り出す。普通はこうする。ところが妻は干してある豆の枝の莢を一つひとつハサミで切り始めたのだ。それを見た私は〝何をしているの、そんなことしていたらいつ終わるかわからないじゃない〟と非難してしまった。一つひとつ切るなんて手間と時間がかかると思ったからである。でも彼女はこの方が豆をきれいに収穫できると譲らない。

　なぜブルーシートの上で叩くかと言えば〝効率的〟だからだ。しかし妻の話を受けて、冷静に考えてみれば私たちはこの作業を急いで終わらせる必要はないのだと気づいた。定年退職後の田舎暮らしは時計を気にする必要はない。作業を早めに終わらせても次にしなければならないことは特にない。そこで妻の言うとおり私も一つひとつ切り始めた。のんびりとゆっくりと作業を進めたのである。この間、妻との会話は弾んだ。実に楽しかった。豊かだと思った。

思い起こしてみれば現役時代にこのようなことはまったくなかった。どうすれば効率的に早く仕事を進めることができるかばかりを求めていた。でもそれは実は貧しいことであったと、今わかった。

年頭のご挨拶

塚田貫康　常福寺住職

平成最後の年頭に当たり、謹んでご祝詞を申し上げます。

「古人言わく、径寸十枚、これ国宝に非ず。一隅を照らす、これ則ち国宝なり、と」

　伝教大師『天台法華宗年分学生式』冒頭の言葉です。「直径一寸の玉が十枚あって車の前後を照らす。これが国の宝である」という魏王の言に対し、「わが国にはそんな玉はないが、それぞれの一隅をしっかり守っている人材がいる。それぞれが自分の守る一隅を照らせば、車の前後どころか、千里を照らす。これこそ国の宝である」との斉王の答（唐妙楽大師『止観輔行弘決』）を踏まえたものです。

　また、報徳二宮神社（小田原市）の額に記されている言葉に、「経済なき道徳は戯言であり、道徳なき経済は犯罪である」とあります。現代社会の有り様を見抜いたような含蓄ある教えです。経済は社会の維持に必須のものですが、道徳と一体でなければ犯罪ともなるし、経済をともなわない道徳は戯言であるというのです。国内および国家間の政治・経済をめぐる諸事象は、現実の諸問題と人の道との調和が保たれているときに安定した状態をもたらします。

　善し悪しはともかく、先の大戦後の世界を維持してきた秩序がくずれつつあり混迷を深める世界にあって、種々の思わくが渦巻く困難な現実の中でそれを見極め、慚愧の心によって維持される道を失わず、各自が「一隅を照らす」生き方をすることにより、実り多い新しい始まりが期待できるでしょう。

国連人権委員会への民間からの派遣

杉原誠四郎　新しい歴史教科書をつくる会　前会長

旧年八月、私も幹事の一人を務めている「慰安婦の真実国民運動」より、ジュネーブの国連人種差別撤廃委員会に派遣団を派遣し、ショート・スピーチを行った。

　周知のように、国連人権委員会はとんでもない偏った勧告を日本政府にする。

　しかしこれは日本のNGO（人権に関する国際的活動を行っている非政府組織）が事前に勝手な偏見を人権委員会委員に訴えるからだ。韓国慰安婦を人権委員会が「性奴隷」だと言うようになったのは、平成四年に日本人の弁護士が委員会にそのように訴えたからだ。そのため今では世界中に韓国の慰安婦像が建つようになったのだ。

　平成四年の頃は、国連は左翼の運動団体の独壇場で、そのために偏向した勧告が日本政府に次々と出されたのだ。

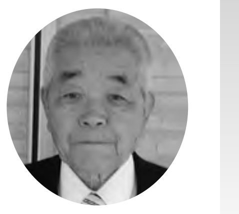
　今年の八月も委員会の勧告は偏ったものだった。しかし今年は我々の団体も参加していたので、直ちに抗議声明を出し、この勧告の無効化に成功した（詳しくは「慰安婦の真実国民運動」のホームページを参照）。

　このように見てくると、平成四年頃に「慰安婦の真実国民運動」のようなものが存在して活動していたら、今頃世界には慰安婦像は建っていなかったということになる。

　年頭に当たって、日本国民にお願いしたいのは、このような運動団体への資金援助である。資金がなければ、このような日本を守るための活動は直ちに終息してしまうのだ。

七福神に守られて

水口成一　宗教法人 不動明王 教祖



明けましておめでとうございます。時々七福神が私の前に現れて私をじっと見つめることがあります。

　七福神とは恵比寿、大黒天、福禄寿、毘沙門天、布袋、寿老人、弁財天とされています。

　誰でもが七福神の恩恵と見守りを受けながら生活しているのですが、私たちはそのことに気が付かないで生活しています。私たちは日々苦労と苦難の連続でありますが、いついかなる時でも七福神がいつも見守っているという確信を持つべきです。七福神の恩恵をしっかり受け止めて今年一年日々感謝する年にしましょう。

地域から必要とされるお寺に

瑞田信弘　浄土真宗本願寺派　称讃寺住職

毎年の事だが、新年にあたって昨年を振り返ってみると、当地四国でも近隣の末寺の廃寺の話題が多かった。毎年数ヶ寺が廃寺となっているようだ。人口減少や過疎の影響は極めて大きい。

　数年前に「寺院消滅」の書籍が話題になった。昔には「葬式仏教・観光仏教」と揶揄され「坊主丸儲け」と言われた。葬式は家族葬や一日葬が多くなり法事も段々しなくなり、葬儀や法要の儀式で生計を立てている僧侶は丸儲けどころか赤字で兼業せざるを得なくなってきている現状がある。消費税の増税はお布施はそのままで支出は増える訳だから益々台所は苦しくなる。淘汰されるお寺が多くなる訳だ。

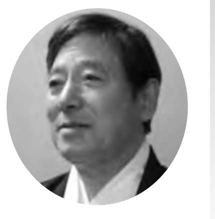
　お寺や僧侶の使命・役割は何なのか？　まさしくそれを考える時が来た。釈尊は、この世は苦だと言った。苦の原因はその人の煩悩だと言った。煩悩を滅する為に八正道を実践せよと言った。ここが仏教の原点だ。人々が安寧に生活ができて、悩み少なく心豊かに毎日を過ごすことが出来る為に、お寺や僧侶は何が出来るのだろうか？

　現代の僧侶はこの点を意識しているのだろうか？　昭和四十年頃まではお寺は地域の宗教・教養・文化・生活の中心であった。今こそ、門信徒だけではなく地域の人々の為のお寺となる為に、何が出来るかを考え実践する時だ。お寺の原点に返る時だ。

　地域から必要とされるお寺になるべく一歩を踏み出す時が来た。本来の活動をしているお寺は強い。葬式と法事しかしていないお寺は将来淘汰されるのみだ。宗門は寺院経営について僧侶の経験交流の場を多く作るべきだと思う。

伯家神道の伝承を！

奈良泰秀　神職・NPO法人「にっぽん文明研究所」代表



明けましておめでとうございます。

　今年は改元で新しい元号と交替する十二支最後の亥年、干支の組み合わせでは三十六番目となる己亥の新年を迎えました。古来、己亥の年は次の発展に向けて物を伏蔵する働きがあり、新しい時代への展開や新事業の計画や準備をする年とされています。

　まさに今上天皇がご退位され、新天皇が御位に就かれて新しい御代に向かわれるための準備を整え、一生に一度の記念すべき践祚大嘗祭を執り行われる年となります。

　新天皇の存在には大いに期待します。

　これからは様ざまな国から多くの人が宗教や文化習俗と共にやって来ます。日本で仲良く暮らしていくために、日本の良さの「和の精神」を学んで貰いたいと思います。

　新天皇には新しい時代を展望されつつも伝統を重んじられ、和の精神の体現者としてご活動されるものと信じております。

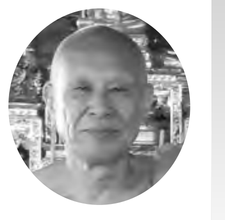
　私共は昨年より宮中祭祀の重要性に鑑み、神祇伯御法・伯家神道伝承のための初伝指導者養成講座を開催しています。八百年に亘って伝えられた伯家神道は明治に途絶しますが、昭和十一年に白川家絶家となる第三十三代の資長子爵が会長を務め、多くの著名人を役員に据え、伯家神道の公開研修をする『皇道斎修会』を設立しました。

　しかし全国展開の前に戦争で組織や道統は四分五裂の状態となり現在に到ります。

　永年に亘り伯家神道をご研究の、精神科医で神職の小松馨平先生にご指導をお願いしております。先生の未公開や秘伝の行法を開示して頂き、正統派の伯家神道の継承に努めています。新天皇を始め宮中の弥栄のためにも伯家神道の興隆を願いたいものです。

文化の壁を超えて交流の時代を

松下しょうこう　WAT JAPAN〈Thailand〉住職



タイ語の〝サワデーピーマイ2562〟（新年明けましておめでとうございます）は、後ろから「タイの佛暦、あたらしい（マイ）、年（ピー）、こんにちは（サワデー）」の順です。

　世界では民族や文化にたいする認識や理解不足で対立や戦争が起きています。人間社会では共通なことも多くあるでしょう。が、ひとりひとり違って当然と思えば対立や戦いになりません。平素から文化交流や相互理解の話し合いがあれば溝は狭くなっていきます。

　タイ北部にあるワット・ジープン（日本寺院）は、信仰の自由を保障された国タイで旗揚げして6年経ちます。もちろんタイ国の主なる宗教は、上座部仏教です。タイにある寺院には多くの日本人が修学のため出家しています。わたしも2018年2月大乗仏教（日蓮宗）教師だが快く出家をさせてもらいました。そして日本でも他宗・他国の外国人修行者や教師が当たり前に修行できる環境ができてきています。

　日本の国際時代は、物から人に移ってきています。そしてIT時代そしてAI・ICT活用時代です。ただその智慧を動かしていくのは人間です。インドで生まれた「仏教」、そのお釈迦さんの思想を学び理解し活用してもらうことが大切です。そのことを一層根付く年にしたいと願っています。

御代替りを控えて

利根康教　寒川神社宮司

畏くも今上陛下におかせられましては、御即位より数え三十年という佳節をお迎えになられましたこと、誠にお目出度く慶賀に堪えません。この佳節を多くの方と共にお祝い申し上げ、陛下への感謝の誠を捧げるべく、当神社におきましても一年を通じて種々の奉祝記念事業を企画し実施してまいりました。

　天皇陛下には御即位以来、御多忙な御公務を担われる中でひたすら国家・国民の平安と世界平和への祈りを重ねてこられました。喜びの日も悲しみの日も、国民と共にあらせられる天皇皇后両陛下には愈々お健やかにお過ごしいただき、御皇室の御安泰を心から御祈念申し上げる次第でございます。

　昨年を振り返りますと、様々な事柄に「平成最後の」という言葉が枕詞のように付けられ、どこか違和感を覚えた一年でもありました。「平成最後の夏」などと言われると「何か特別な事をしなければならないとの錯覚さえ感じます。私が持った違和感は、神道における「中今」という思想と相反していたからに外なりません。「今」とは「限りない過去から限りない未来」の中の一瞬であるから、常に特別であるという考え方が神道にはあるのです。

　御代替りまで約半年となり、我が国に向けられた国内外からの視線は熱さを増す一方でございます。今こそ、斯界関係者が同じ志の下で、一丸となって奉祝の機運向上に邁進せねばなりません。「今」という時を一瞬たりとも無駄にすることなく、常に特別な瞬間であることを改めて肝に銘じる次第であります。

「あり方」を説き王道を歩む

市川覚峯　日本経営道協会会長　企業家ミュージアム代表

元号が変わろうとしている今年。昭和から平成の三十年間を振り返ると、〝今だけ、金だけ、自分だけ〟といった日本人が増えてきてしまったように思う。昭和の時代、私達は先達から東洋的な三原則を叩き込まれてきた。その第一は目先にとらわれず、長い目で観察すること、第二は一面にとらわれず多面的に考察すること、そして第三は枝葉末節にとらわれず根本的に観察することである。

　現代の人々はあまりにも目先の利益を追うような人間が多くなったことに憂えずにはいられない。彼らが求めるものは即「やり方」である。どうすれば〝成果が上がるか〟〝得するか〟の方法論を求める前に、基本的な〝あり方〟が大切であると思う。

　つまり自分は人としてどうあるべきか我社は、我が寺は我が神社はどうあるべきか、新元号に変わろうとする亥の年、今再びあり方を考え直す年であってほしい。そしてそれぞれに寺社の本分に基づき、「王道」を志向していただくことを願いたい。

　またそれぞれの立場において人間の本質とか〝あり方〟について語って、発信し続けていただきたい。具体的には「慈悲とは」「利他とは」「抜苦与楽」など佛道の内容である。「清明正直」や「真善美」等、神々がお喜びになる人間としての〝あり方〟を機会あるごとに発信し続けていただくことを年頭にあたり期待しお祈り申し上げます。

改めて日本の伝統文化を

春木伸哉　幣立神宮宮司

平成最後の新年、御譲位による御代替わり「平成から新しい御代へ」を迎えます。清々しく新年を迎え新しい御代へつなぎたいと心を弾ませています。

　御代替わりは同時に元号が変わることを意味します。〇〇元年五月一日と表記します。連続の中に区切りをつけて新しい時間を生きる文化を伝統とするわが国、先祖代々守り続けて頂いた知恵に感動を以て新年を迎えます。

　神道は祓いによる甦り、常に生まれ変わり清々しく生きることを旨とします。神道の心が日本人の生活全てに満ちていることを改めて実感する新年を迎えます。初詣は旧年に感謝し新しい年を生きる心構えを神さまと心を結び合う出会いの日です。

　私が小学生の頃は黒板の右端に「昭和　年　日」とあって、その日の当番が日にちを書き込むことから一日が始まりました。いつの頃からかこの表記が消えて、学校教育の中から元号離れが始まりました。歴史を無くした民族は滅ぶと言われます。教育は個人の資質を高めると共に国民としての文化を身につける事にあります。一見些細なことのように見えますが、御代替わりに日本をもう一度見つめたいと思います。

　子供のうちに元号を普通に生きるように育てたいものです。

グローバル・リベラリズムに歯止めを！

金子宗徳　里見日本文化学研究所所長

平成三十一年の新年を謹んで御祝ひ申し上げる。

　本年は御代がはりの年。それに合はせて、グローバル・リベラリズムに歯止めを掛けたい。

　グローバル・リベラリズムの背景には、経済的利益の追求を至上の目的とする新自由主義的拝金思想が存在する。この考へからすれば、「同胞」に対する共感共苦の念に基づく愛国心、ひいては「利他」の精神を重んずる宗教心は否定されるべき存在だ。

　こうした拝金思想の背景には、個々人の存在を絶対化する個人主義が存在する。この個人主義は「我思ふゆゑに我あり」と説いたデカルトに端を発するが、さうした認識論に止まらず、国家を歴史的に形成された共同体ではなく、個々人の社会契約の産物と見なすロックやルソーの議論にも影響を与へた。また、スミスなど個人の経済活動を重視する思想は云ふまでもなく、「持たざる者」の個人的不満を煽り立てるマルクス主義もまた、個人主義と無縁ではない。さらに、価値創造の主体である「超人」たらんとしたニーチェの実存主義や、それを受け継いだポストモダン思想に至つては、個人の刹那的欲望を全面的に肯定してゐる。

　私たちは、個々人を超えた究極的存在を意識することで個人主義を乗り越え、まずは「立正安国」の精神に基づいて日本国を立て直し、ひいてはグローバル・リベラリズムに基づく世界の一体化ではなく、世界人類が真の意味において共存する「八紘一宇」を実現せねばならない。

年頭のご挨拶

小林芙蓉　書画家

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

　昨年も中国や韓国、フランスなど国内外で揮毫と親善活動をさせていただきました。政治面で不安を抱える今だからこそ、芸術を通じて少しでも心が温かくなるようなプラスの交流ができればと必死になって動いてまいりました。

　その一環として、今年三月二十日に京都のウェスティン都ホテルにて、延べ三千人で祈りを深め、これからの世を明るく照らそうというイベントを開催いたします。今までご縁のあった方々を大勢お呼びして、にぎにぎしくお祭りができればと思っております。

　また、同じころに映画「ソローキンの見た桜」が全国で順次公開予定です。こちらはタイトルの「桜」を揮毫させていただきました。二〇一八年日露交流年記念作品であり、ロシアと日本の国を超えた心の交流をうたった話になります。

　奇しくも同時期に開催されますが、どちらも敵味方にとらわれず、一緒になって仲良くしていこうという共通の願いのもとに企画されました。

　海外ではイギリスのEU脱退や米中の貿易戦争、独裁政権の拡大など、自国優先の政策が増えてきています。しかしながら、本来人間は一人では生きてはいけません。日本の伝統的な「和」の精神、調和や思いやりの心は、いま一番世界に必要とされている。そう強く感じます。これからも微力ながら、和の心を広げ、祈りで平和な世界に近づくため活動してまいります。

先人への感謝の心を伝える

室舘　勲　株式会社キャリアコンサルティング代表取締役社長

大学生の就活支援や20代、30代の学生や社会人へリーダーシップの基礎教育を主軸に事業をおこなっています。就活支援では年間で約5000人の学生の登録があり、就活生が約50万人と言われる日本において、100人に一人が弊社のサービスを利用いただいていることになります。日本の将来を担う若者を預かっている責任の重さをひしひしと感じながら日々の指導を心がけています。その中で大切にしているものの一つが、「先人への感謝」です。

　就活生には、「会社に入社させていただくというのは、途中乗車なのだよ」と伝えています。会社を立ち上げるときの創業者の想い、ここまで作り上げてきてくださった諸先輩方の想い、これまでつないでくれた想いのバトンを未来に繋いでくれる人と思われたからこそ入社を認められたのだよと。

　社会人には、まずは自分の両親、祖父母への感謝が大事なのですよと伝えています。自分の10代前も溯れば、その間2046人ものご先祖さまがいて、その一人でも欠ければ今の自分は存在しません。

　そして、未来の日本のために、未来の子どもたちのためにと、自らの命を掛けて繋いでくださった、先の大戦で命を落とされた方々への感謝の想いを伝えています。「感謝の心、若者に靖國を伝える会」として、毎年1月3日、靖國神社に参拝しています。2019年は21年目を迎え、これからも感謝の心を繋いでいけるよう、気持ちを新たに若者を教育していきます。

新しい光

竹下節子　比較文化史家・バロック音楽奏者

西暦二〇一九年は、元号が変わる日があらかじめ分かっているという日本にとって記念すべき年です。人生のはじめの四半世紀を昭和の日本で過ごし、その後の四〇年以上をフランスで暮らす私には、平成の次の時代が来るのかと思うと感慨深いものがあります。

　ヨーロッパ諸国にはまだ王室が存在しています。思えば二一世紀に入ってから、ルクセンブルク、オランダ、ベルギー、スペインなどの君主が次々と生前退位を決めて世代交代に踏み切りました。高齢や健康の問題だけではなく、王室の精神を受け継ぐ次世代の準備が整ったからだということでした。王位の継承と共に、大切なのは、国を思う王の心の継承だということでしょう。

　同じころ、世界中の一二億人のカトリック信者の頂点に立つ終身の地位であるローマ教皇ベネディクト一六世が先例を破って退位しました。独身制のカトリックでは血縁は関係なく、国籍も関係がありません。世界平和と弱者救済、環境保存を祈る諸宗教の共生を促す「聖霊」の継承者が求められたのです。

　組織や人心の刷新のために「代替わり」が目指されることもあるし、「代替わり」によって新風が吹き込み新しい地平が見えてくることもあります。年明けの「新しい光」と共に、この記念すべき年が、新しい生命の躍動を促してくれることを願ってやみません。

年頭のご挨拶

柴田久美子　一般社団法人　日本看取り士会会長

©清水和士

明けましておめでとうございます。

　2025年、団塊の世代の方々が75才以上となりこの国は4人に1人が75才以上という超高齢社会になります。厚生労働省の試算では、その5年後の2030年には、病院でも施設でも自宅でも死ねない「看取り難民」が47万人に達する見込みです。この大きな問題に微力ながら解決の一助となればと看取り士と無償ボランティア・エンゼルチームの仕組みを七年前に創りました。看取り士は現在400人を超え、無償ボランティア・エンゼルチームは450チームを超えました。孤独死が急増する中でこの国の未来に向けて子孫に〝命のバトン〟を受け渡して旅立てる社会創りを目指しています。日本の哲学者、教育者として著名な森信三先生も「2025年日本は立ち上がるであろう」と予言されました。森先生の予言のように必ずや、この国の未来が明るいものであるように祈りながら私達はこの度、映画「みとりし」を製作致しました。本年九月全国ロードショーを予定しております。友人の榎木孝明氏が主役を演じて下さいます。男性に尊い場面の看取りに立ち合って頂き、〝命のバトン〟の受け渡しを凛として執り行って頂きたいと願っております。私達の夢は全ての人が最期愛されていると感じて旅立てる社会創りです。

　どうぞ本年もよろしくお導き下さいませ。

全ての尊い命
やさしく　やさしく
やさしくと
唱えながら